

SSKW

海から海へ

No.16 2008.1.25【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ
〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



希望の人 People toward Hope 910x727 ©Mizuki Tanaka 1999

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きること貢献することを目的として活動しています。

本年もよろしくお願ひいたします

昨年は、本法人念願の田中瑞木美術館の設立が実現しました。小規模ですが、多くの方が望んでいた画家の絵の常時展示が可能となり、それらの絵を前に対話のできる場所ができたことは、たいへん喜ばしいことです。美術館の設立を記念し、調布市文化会館「たづくり」で、調布市文化・コミュニティ振興財団主催(協力:海から海へ)による「田中瑞木展」が開催されたことも、嬉しいできごとでした。本年も、アートを媒介に、いのちの大切さを根底におく活動をして行きたいと思ひます。

今の日本の社会では、大きな問題が次々と起きています。若者は夢を実現しようとしても、困難な現実が待ち構えています。心ならずもワーキングプアと呼ばれ、不安定な生活を強いられます。やさしい気持ちから介護の職場に入っても、厳しい仕事に疲れ、少ない報酬で生活が成り立ちません。子どもは、家庭や学校で勉強ができることのみ求められます。勉強は将来良い職業につくためのものとしか教えられず、そのように教える親や先生は少しも幸せそうではありません。昨年、高い評価を与えられ信頼できるはずの人たちの偽りが次々と明るみに出たことは、価値観がゆらいでいるこの社会を象徴しています。

私たちはこの社会でみな幸せに生きたいと願っています。そのためには、政治的な制度や経済的な基盤が必須です。同時に、日常のささやかな喜びの中に、生きていることのすばらしさを感じることができると、そのことを誰かとともに感じる必要がある環境が必要です。制度や経済基盤とこのような考え方や環境とは相互に作用しあうものです。私たちはこのような視点から活動を行い、政治経済基盤へ影響を与えたいと思ひます。

障がいをもつ人、高齢者、子どもなどは、社会が見失っている大事なものを気づかせます。大事なものは、「生きていることはそれ自体すばらしい」ということであり、その気づきは、沸き立つ喜びをもたらします。本法人は、このような視点から、芸術心理福祉活動を行い、ともに学びあうことからこの社会を変えて行きたいと思ひます。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。



地域へ仲間入り

上布田商栄会に入会しました。

調布北口から布田方面旧甲州街道を中心に、多くの商店があります。お茶、牛乳、金物、陶器、文具、野菜など、何でも手に入ります。書店、不動産屋さん、レストラン、薬局もそろっています。海から海へ(「海」)の事務局と美術館のあるマンションは、そのような商店街の中にあります。「海」の事務所の登記場所は現住所に移るまで、店主の田中和己さんのご厚意により「うつわ和季」に置かれ、お店には田中瑞木の作品が展示されておりました。

商店街の方とは、「海」のイベントに商店街の方が参加されたり、商店街の催しを楽しませていただいたりというお付き合いをしてきました。地元で生まれ、育ち、お店を継がれ、お子さんを母校に通わせている皆さんは、暮らしを大事にする中でお仕事の発展を考え、さまざまな活動をされています。上布田商栄会は、そのような商店の皆さんの組織です。「海」は非営利組織ですが、地域の中で人の役に立つという役割は共通しますので、入会を決めました。

暮れには、同会の忘年会に出席しました。ごあいさつから、上布田商栄会は調布で第二の規模とのこと、活発な活動がうかがえました。多くの方とお知り合いになる良い機会となりました。「Mちゃんは毎朝7時40分頃うちの前を自転車を通るよ」、「いつも気にしてる、みんなそうだよ」と、障がいをもつ画家のことを愛情こめてお話しされます。近くの広い場所に美術館を建設しようとお話しされる方もいらっしやいます。嬉しいことです。今後、住みやすいまちづくりへ向け、協力して活動していきたいと思ひます。



2007年9月布多天神社秋季例大祭にて上布田商栄会の皆さん

美術館だより

田中瑞木美術館では、1月20日より春季展示をいたします。新作「窓辺のゆり」が本邦初公開となります。6ヶ月の時間を経てようやく完成のこの作品は、ゆりの持つあたたかさと凛とした姿を目の奥に刻み付けた画家が、ゆりへの思いをさまざまに変化させ、毎回楽しみながら描きつづけました。みなさま、どうぞお出かけください。

昨年6月には丸の内行幸地下ギャラリーで、日本フィランソロピー協会が企画し三菱地所などが協力した「アート展 めくもりのある日本、みんなが隠れた才能を持っている」にも招待出品いたしました。

今年はどうのような1年になりますでしょうか。美術館がより一層気分の良いスペースとなるよう、励んでいきたいと考えております。よろしくお願ひいたします。

春季開館期間

2008年1月20日～4月20日の毎週日曜日

開館時間

13:00～17:00

入場無料

展示作品

1. 窓辺のゆり 910x727 2007
2. 花とレモン 727x606 1990
3. 花とコップ 606x727 1989
4. 花と人形 606x727 1990
5. さくら 1167x910 1996
6. 春 910x727 2000
7. ブランコ 1167x910 1998
8. ブランコのスケッチ 297x210 1998
9. よそのねこ 380x455 1985
10. よそのとり 380x455 1985
11. パレットをもつわたし 530x455 1987
12. ねこの原っぱ 1303x1620 1994
13. 希望の人 910x727 1999
14. おひなさま 455x530 1987
15. 静物 350x270 1985
16. 出沢さんとわたし 606x500 1990

お知らせ

🎨 作品「ブランコ」が月刊「フィランソロピー2月号」の表紙を飾ることになりました。2000年の「秋のサファリパーク」に続いての起用です。

🎨 絵はがき 24種類と館長の成長記録が書かれた『絵はコミュニケーション』を販売しております。

🎨 3月に『みずきのびじゅつかん』刊行予定です。



「アート展 めくもりのある日本、みんなが隠れた才能を持っている」にて

よそのとり



イヴ・クラインという芸術家は今までだれも見たこともないブルーを創った。インターナショナル・クライン・ブルー。その深い青色の世界に10羽のとりがいる。

小さなとり、大きなとり、白いとり、黒いとり、模様のあるとり、きょうだいのとり、足の太いとり、さまざまなとりがさまざまなかつこうで、集まっている。とりたちはくちばしを広げ、合唱しているようだ。

画面左部と右上に目玉焼きとゆで卵が描かれている。瑞木は卵が苦手。それなのになぜ描いたのか、その理由を話してくれない。

本当のことは本人でも分からないときがある。自分とほかの人の間にはわからないことはたくさんある。けれど、そのまま受け取ることが大切と思うときがある。

ほら、とりだってこんなにいろいろいるよ。人だってとりどりよ。

(『みずきのびじゅつかん』より抜粋)

親子の上手なコミュニケーション講座

2008年3月9日(日)午後1:30~3:30

会場/電気通信大学 創立80周年記念会館

主催/特定非営利活動法人 海から海へ

後援/調布市教育委員会・電気通信大学

参加費無料 定員30人

平成19年度調布市社会教育関係団体補助金交付事業

子育て中のお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんを対象に、親(大人)と子どもが上手にコミュニケーションをしていくためのワークショップを開催いたします。

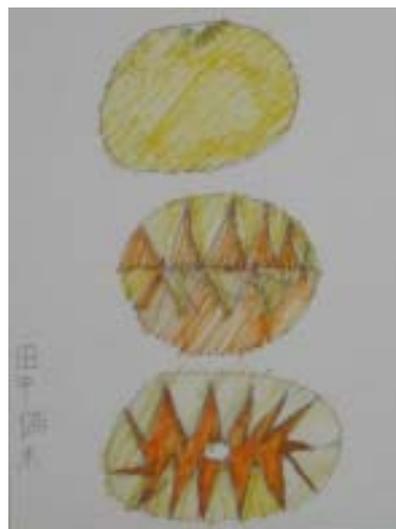
第1部は、子育て中の親御さんたちにロールプレイ(役割演技)を通して、子どもの目線で親子のコミュニケーションを実際に体験していただきます。

第2部は、保育園の栄養士さんをお招きし、栄養があって、子どもたちに人気の手作りおやつを試食とレシピの公開をいたします。

第3部は、佐藤 誠先生(元日本大学心理学科教授、調布市教育相談室講師などを歴任。「親子の心理とウェルネス」「子どものいじめ・対応と対策」など著書多数。調布市在住)による「子育てトークおよび具体的で示唆に富んだ子育てアドバイス」を開催いたします。

子育て中のお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんのご参加をお待ちいたします。なお、保育士による無料の託児をいたします。事前予約を済ませた方のみ受け付けます。ご希望の方は2月末までにお申込ください。託児のお申込は090-4918-8852 阿部

この機会に、家庭における親(大人)の対応や役割をご一緒に考えてみませんか。今後もお父さんやお母さんがさまざまな人とつながり、仲間作りの場となるよう、参加者のネットワークを作り、必要に応じて相談活動などのお手伝いをしていきたいと思っております。



マーマレードになるよ 297×210 ©Mizuki Tanaka 2000

編集後記

電気通信大学生協学生委員会から3万円のご寄付をいただきました。大学祭で、学生たちが地域のお宅を回って集めた物品を出店するバザー「我楽苦多市」で得た収入だ。生協委員会室では4人ほどの学生がたむろしている、と見えたが、よく見ると、教科書やノートを広げている。聞くと学年も学科も違う。1年生は学科共通だから、先輩に教わることもできるらしい。代表のK君が戻ってきた。礼儀正しく大人の雰囲気だが、笑うと若者というより少年のような初々しさが好ましい。指示通り手続きを済ませ、お金をいただいた。重いものを運び、売り物としてきれいにし、並べ、値をつけ、お客さんと交渉するといった、バザーの準備や実行にはたいへんな手間がかかることを知る私は、このお金の持つ重みを実感する。海から海への活動に役立てたい。

毎年このように、多くの方からご寄付をいただく。お時間を作って郵便局や銀行へ足を運び、入金してくださる方、絵の出前先で封筒に現金を入れてくださる方…。「海」の活動はこのような大勢の方々に支えられている。(輝)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

2008年1月25日 海から海へ No.16

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価 200円

無断転載禁止